

子ども記者が行く!



企業・工場見学

株式会社 石黒鋳物製作所



「恵庭に工場を持つ会社で、変わった植物の栽培をしているところがあるんだって。塩を振らなくても塩味の野菜なんだって。葉っぱもずいぶん変わっているんだって!」

「えーっ! 見たい、見たい、見たいーっ!」

「よし、じゃ、行って見せてもらおうよ!」

1月18日夕方、その、ずいぶん変わった野菜を見せてもらいに、南島松にある栽培ハウスを訪ねました。

●記者 本保智美

その野菜は「アイスプラント」という名前です。石黒社長自ら、ハウスを案内してくれました。南アフリカ原産で、普通は15度から25度で育つというアイスプラントを、無農薬で育てているハウスです。冬は中が14度に保たれるようになっていて、それより温度が下がると温風がビニール下から出てハウスの中を温めるようになっていました。

夏は、ハウスの中が暑くなり過ぎないように、ハウスのビニールを開けるのだそうです。

■アイスプラントってどんな野菜?

しつかりした歯ごたえと天然の塩分のうま味があります。葉や茎の表面にキラキラした水滴のよ

うな液胞がついていて、とてもきれいな。この粒々が氷のようにも見えるから「アイスプラント」と呼ばれているもの。

■キラキラした粒々は何なんだろ?

水滴でも氷の粒でもなく、根から吸い上げた地中のミネラル成分を蓄えた『ブラッター細胞(英語: Bladder Cell)』と呼ばれるもの。



ここでは、塩分を混ぜた培養液を一滴ずつ根に与えて育てる『養液ポット式栽培装置』を使っています。

■氣になるお味は?

根元に近い大きめの葉をちぎって試食させてもらいました。確かに少し、しょっぱい味がしました。また、肉厚な食感が何とも言えません。

■塩ナシで育てるとどうなるのかな?

ひんやり、しつとりとした感じはネコの足のウラのような感じです!

キラキラしたブラッター細胞ができないようです。でも、ちゃんと育てます。

■社長さん、どうしてアイスプラントを育ててみようと思ったのですか?

「カイワレやモヤシを作っている社長さんと友だちで、たまたま使っていない水耕栽培の設備があるし、アイスプラントは面白い野菜だからやってみないかと声をかけてくれたので、「じゃ、やってみようかと、軽い気持ちで始めてみました。去年の4月くらいからです」

■水耕栽培って?



畑の土ではなく、土の代わりに水に栄養を入れて与える育て方です。ここでは、鉢の中に水はけの良いピートモスとパーライトを入れ、塩分を混ぜた培養液を細長い管を通してポタリポタリ

と落とす仕組みで、一日2回、鉢の底からアイスプラントに吸わせるようにして育てられています。

■どのくらいで食べられるの?

ハウスの中で育っていたのは、昨年10月に種まきをしたもの。3カ月くらいで、ちょうど食べ頃になりました。「来週、千歳の市場に出荷するところ」とのことでした。



また、アイスプラントは一年草。つまり一年で花を咲かせて、種ができて枯れますが、花べんにもブラッター細胞があり、キラキラしてとってもかわいい! (写真右)

■おいしい食べ方は?

生でサラダが一番おいしいのですが、茎の天ぷらなどもイケルようです。

■栄養的にも優れているのガスゴイ!

中性脂肪ができるのを抑える『ミオイノシトール』や血糖値を下げる効果の『ビニトール』などの成分を含むそうです。

■酸味は天然のリンゴ酸。ナトリウム、カリウム、コロテンなどのミネラルを豊富に含み、キャベツやハクサイ、レタスなどの特徴を、ひとつに凝縮したような栄養価が高い野菜です。スーパーで見かけたら、ぜひ試してみてください!

◆◆◆

次に、アイスプラントの栽培ハウスから北柏木に移動して、本業である資材や機械製作の工場を見学しました。



頭の上を見上げるとの高さ(12、13m)天井の工場では鉄板を切ったり曲げたり、まぶしい火花を散らせながら溶接して

3ページへつづく

連載コラム 2月

シカの国道



この季節、楽しまのひとつが雪のふりつもった山に出かけることです。山とはいっても、家からほんの5分ほどの距離にある丘です。

この丘のすこいところは、その後背地が樽前山の原生林に、寸断されることなくつながっていることなんです。



種類も、豊富なんです。ヒグマの「通り道」もありますから、季節によっては注意しなければなりません。雪の季節はヒグマも冬眠中なので、ちょっと気が楽です。

日がのぼってあたたかくなつてから双眼鏡を首にさげて家を出ます。ふだんは人が入らない場所ですが、造園事務所の手ぐらうら手です。

30センチほどの積雪のうえにいろいろな足跡が見えています。この足跡を見て歩くのがたのしいのです。キツネ、ウサギ、シカ、キジ、ネズミ...などなど。足跡をみていると、それをつけた動物のしぐさや表情が見えるようです。

すこし先へ行くと、幅20センチほどの「道」ができています。しよつちゅう使う道らしく、そこに立ってみたら、しっかりとかたまっていました。ひづめの痕がくつきり残っているので、シカがつけた道であることがわかります。交差したり、枝道があったり。雪原の踏み跡は、シカたちの生活ぶりを手に取るようにわからせてくれます。

さしずめシカの国道だな、と自分の命名に自分で感心して、有頂天になっていました。

【森厚(もりあつし)】

苦小牧市生まれ。第2回とまみん文学賞、第47回地上文学賞、そして、小説「TAKARA」で第52回農民文学賞を受賞。道新文化センター(札幌)「教室で仕あげる掌篇小说」講座を担当。

